

近代文学における住空間の記述の相関性

文学 住空間 空間構成 認識

正会員 ○ 大西 孝\*  
同 渋谷佳克\*\*  
同 若山 滋\*\*\*

【序論】近代文学作品の中で描かれた日本の伝統的住空間は、明治時代の生活と密接に対応しながら、空間を仕切る境界の可変性と空間の認識の多様性によって、多種の空間構成を見せている。それは、作者という明治時代を生きた一人の人間の空間イメージによって描かれたものであるが、作品が当時の多くの人々の共感の支持を受けて構成されるもので、共同幻想ともいべき空間像を支えている。本研究では、近代文学の中に描かれた住空間の構成を作品中の住空間における人間の行動と認識から、実際の作品の中に設定された住空間をその内部空間を仕切る境界を通して分析することによって、その時代の意識が捉えた住空間イメージを明らかにすることを目的としている。

【研究対象】近代の日本における伝統的日本家屋が描かれている二葉亭四迷の『浮雲』、田山花袋の『蒲団』、夏目漱石の『門』、尾崎紅葉の『多情多恨』を研究対象とする。そしてそれらに描かれている主人公の家に着目し、それぞれの作品によって設定された住空間の構成を明らかにする。

【研究方法】読書行為の視野が文学作品に対して中心に見据えているのは、登場人物の心理や行動であり物語の筋書きとなるプロットの展開である。そして読者は、語り手や登場人物の視点を所有することによって、その周辺のさまざまな事象を捉えながら物語における舞台空間を認識するのである。本研究では、文学がもつこの構造に着目する。登場人物がいる場所を「場所1」とし、登場人物ごとに文章を分割する。分割されたそれぞれの文章において「場所1」から他の場所に意識を向けている場合は、それがどの場所であるかを「場所2」として抽出する。その際、そこをどのように認識しているかを視覚・聴覚・発話・回想・想像の5つの項目によって表示する。次に、登場人物のプロットの展開によって、それが空間的かつ時間的に連続である文章のまとまりを一つの「文章ブロック」として分類し、それぞれの「文章ブロック」にみられる「場所1」の連続を、各作品ごとに「内部空間連続関係図」(図-1)として図化する。作品中で設定された伝統的日本家屋における内部空間の連続は、図-1において場所と場所を線で結んで表す。このよ

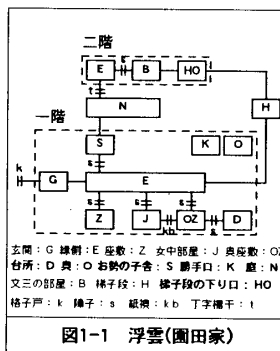


図1-1 浮雲(園田家)  
玄関: G 縁側: E 座敷: Z 女中部屋: J 奥座敷: OZ 台所: D 奥: O 右奥の子舎: S 勝手口: K 庭: N 文三の部屋: B 梯子段: H 梯子段の下り口: HO 格子戸: k 障子: s 紙障: kb 丁字障子: l

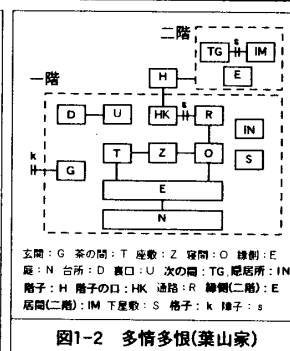


図1-2 多情多恨(葉山家)  
玄関: G 茶の間: T 座敷: Z 縁側: O 縁側: E 庭: N 台所: D 裏口: U 次の間: TG 廊下: IN 障子: H 障子の口: HK 通路: R 縁側(二階): E 居間(二階): IM 下座敷: S 格子: k 障子: s

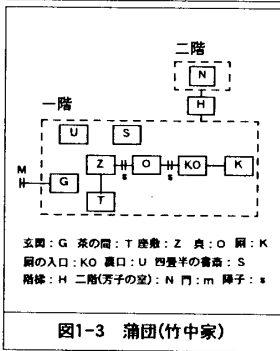


図1-3 蒲団(竹中家)  
玄関: G 茶の間: T 座敷: Z 奥: O 廊: K 廊の入口: KO 裏口: U 西畳半の書斎: S 階梯: H 二階(芥子の室): N 門: m 障子: s

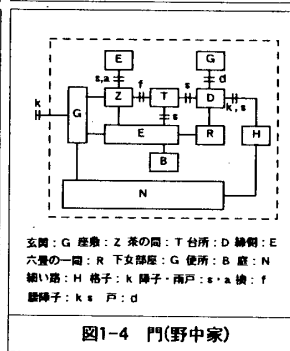


図1-4 門(野中家)  
玄関: G 座敷: Z 茶の間: T 台所: D 縁側: E 六畳の一間: R 下女部屋: G 便所: B 庭: N 細い路: H 格子: k 障子: 障子: s a 襖: f 障子障子: ks 戸: d

図1 内部空間連続関係図

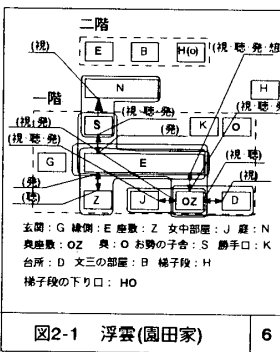


図2-1 浮雲(園田家) 6

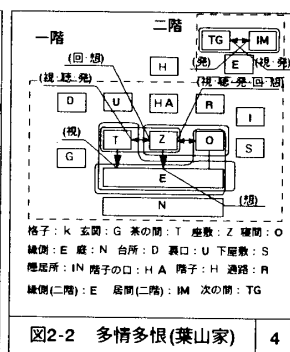


図2-2 多情多恨(葉山家) 4

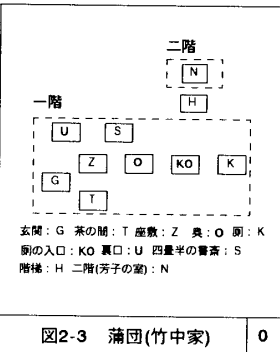


図2-3 蒲団(竹中家) 0

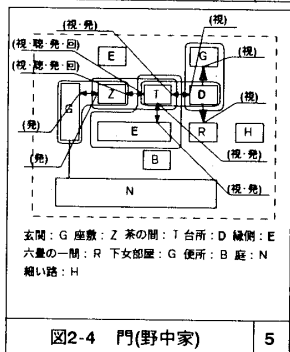


図2-4 門(野中家) 5

図2 連続空間認識図

(右下の数字は□の数を表す)

The correlation of the description of the life space in the modern literature

OHNISHI Takashi, SHIBUYA Yoshikatsu, WAKAYAMA Shigeru

うにして得られた各作品ごとの「内部空間連続関係図」(図-1)から各作品に設定された伝統的日本人屋における内部空間の連続とその構成を考察する。次に「場所1」における登場人物が、「内部空間連続関係図」(図-1)から作品において物理的に連続と設定された「場所2」を空間として認識している場合、「場所1」から「場所2」へと矢印で示し、各作品ごとに「連続空間認識図」(図-2)を作成する。また、「場所1」から「場所2」を視覚・聴覚・発話・回想・想像の5つの項目のどれによって認識しているかも表示し、場所の連続性とそれに対する登場人物の認識の関係が、どのように記述されているかを考察する。以上のように、各作品に設定された住空間の物理的構成に対する登場人物の認識がどのように記述されているかを住空間内部を仕切る境界と共に見ていくことで、各作品の作者、またその時代の人々が持っている住空間像を明らかにしていく。

**【平面構成とその関係性】** 図-1から「縁側」という舞台が、各作品の住空間においてさまざまな舞台と連続の関係にあることがわかる。このことから「縁側」が、住空間において各舞台を繋ぐ通路的な空間であるという形態的側面を表している一方、本研究で登場人物のいる場所を「場所1」とし、その登場人物の行動を追っていくことで、空間の連続性を見てきたことから「縁側」が、単に通路的な空間であるだけでなく、これらの作品の作者(その時代の人々)にとって、特別な意味を持っていたと考えることができる。また、特徴的な舞台の関係として、「座敷」と「茶の間」「奥座敷」といった舞台の関係が挙げられる。『浮雲』において、それらの舞台は「縁側」を介して連続を見せているのに対して、『多情多恨』『蒲団』『門』の3作品については、隣同士という関係を見せている。さらに、これらの3作品の間でも「障子」「襖」といった物理的な境界が存在するものと存在しないものとに分類することができる。これらのことから『浮雲』では、「縁側」という空間が、『蒲団』『門』に関しては、「障子」や「襖」といった建具が、「座敷」と「茶の間」「奥座敷」といった舞台の境界となり、その境界の存在が、「座敷」は外部の人間を招き入れる舞台として、「茶の間」「奥座敷」は家族のプライベートな空間としての舞台という各舞台の使われ方に反映している。さらに、『浮雲』『多情多恨』『蒲団』の3作品に設定されている「二階」が特徴的な舞台として挙げられる。3作品ともそこには、下宿人の部屋が設定されている。しかし、その他の家族の部屋は、ほとんど設定されていない。このことから、これらの作品の作者(その時代の人々)にとって「二階」=「下宿人の住まい」という住空間のイメージを持っていたことが

考えられる。また、その「二階」と「一階」との間には、「梯子段」という段階が存在し、『浮雲』に関しては、「一階」と「二階」という一連の連続を見せているが、その他の2作品に関しては、連続が示されていない。このことから、作者が住空間において、下宿人が住む「二階」と家族が住む「一階」との間に、何らかの隔たりをもっていったことが考えられる。

**【連続空間とその認識】** 図-2、図-3から物理的な連続が示されている舞台として「座敷」と「茶の間」「奥座敷」といった舞台を挙げたが、それぞれの作品において、その各舞台での認識を見ると、それらの舞台は物理的に連続であるにも関わらず「視覚」だけでなく「聴覚」「発話」「回想」「想像」に至るまで、さまざまな方法によって空間が認識されている。このことから、その連続する舞台に「障子」や「襖」という物理的な境界が存在している場合に、その可変性を示唆していると考えられる。また、実際に境界が記述されていない場合でも、さまざまな認識が見られることから、隣接する舞台を、認識するその瞬間、意識の上で距離感のあるものとして捉えているのである。これらのことから、実際の「障子」や「襖」といった境界の記述に関わらず、その舞台の間には、意識の上で何らかの隔たりが存在し、その存在が各舞台のその時代の使われ方(「座敷」は客という外部の人間を招く舞台として、「茶の間」「奥座敷」は家族のプライベートな空間として)に反映していると言える。また、『浮雲』『多情多恨』『蒲団』の3作品に見られる「二階」空間での認識は、またその逆に「一階」の各舞台から「二階」へのそれは、視覚以外のさまざまな認識が相互に認められる。これは、他の空間に対する「二階」空間の物理的な独立性と共に家族が住んでいる「一階」と下宿人が住んでいる「二階」との間に、意識の上で強い結びつきがあることがわかる。

**【結論】** 本研究でとりあげた近代初期の文学作品における住空間の認識において、その中心となる舞台空間では聴覚や回想、想像による認識の傾向が多いことがわかった。また「下宿人」や「客」という外部の人間の進入によって、家族である内部の人間の、空間の相互関係の意識が変化する。このことから、住宅内部における登場人物の空間の意識構造は、そこで演じられる行為およびそこにかかわる信条によって変容するのである。また田山花袋の『蒲団』では、本研究の方法(ある場所に対して、その他の場所という立場)でのデータとして現れてこなかった。これは、その舞台に登場する人物の意識が他の舞台に向かわず、その場に集中していたと考えられる。 図6 空間の認識領域図

\* 名古屋工業大学大学院博士前期課程  
 \*\* 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)  
 \*\*\* 名古屋工業大学教授・工学博士

Master's course, Nagoya Institute of Technology  
 Dr.'course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng.  
 Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng